オリエンテーリング
道場 第89回

数字の示す意味

松澤俊行

3 月上旬のインカレで、イベント・アドバイザーの責にあった道場主。その役目を終えた後に控えていた重要な試合での闘いぶりは。

心は揺れる

2013 年度から新しい環境での仕事が始まり、１年経った後に迎えた全日本大会では、３位を獲得。前夜に激しく嘔吐しながらも、当日は自分なりの好走をし、新たな自信を得ることができました。（この時の様子は、連載の第 83 回に記しています。）

しかし、運に恵まれていた部分もありました。前回は全日本大会が４月下旬にあったため、何とか間に合った、というのが正直なところでした。現在の仕事は、11 月から１月にかけてが最も時間と体力と神経を使う時期となり、2013 年度も、２月や３月の試合では苦戦した記憶しかありません。３月中に全日本を闘わなければならない 2014 年度はどうなることか、不安を感じながら冬を迎えました。

２月に故障をし、インカレ準備にも心を奪われ、状況が好転する感触は一向に得られませんでした。それでも、「インカレ準備があるから気が紛れるし、少しでもテレインに入る機会が得られている」と言い聞かせて不安を払いのけていました。

インカレ翌週には、関東でオリエンテーリング以外の用事を入れ、埼玉県で行われた「クラブ対抗リレー」にも出走。少し悲観しながら迎えたこの大会で、好結果が得られたことで風向きが変わったように感じられました。体調とモチベーションの回復を感じ、「今年も間に合うかも…」との期待が高まりました。

数字は揺れる

全日本の前の週には、ＪＯＡ公認大会でもある京大京女大会が開催されました。復調傾向とはいえ、万全とはいえない状況で臨む久しぶりのロングレース。出走前の不安は大きく、今でもその時の危機感、緊張感をありありと思い出せます。「少しでも気を抜いたら、タイムと体力を大きくロスするようなミスをするし、その後はズルズルと落ちる一方になる」という恐怖を感じていました。つまり、それまでの準備に不安があり、体力的に自信が持てない状態であるため、持ち前の「粘り」が発揮できる自信もなかったわけです。

この日は、そのような危機感、緊張感が高い集中力を生み出し、的確な自己コントロールにつながりました。終始自分なりに納得行くレース運びが行え、フィニッシュ。解放感と、充実感が得られました。しかし、最近は、「自分なりにまとめた」ぐらいで、上位が取れる保障はなくなっています。成績表を見て、「あれだけのことをしても順位はこのぐらいか」と、フィニッシュ直後の充実感を上回る苦い思いをしながら会場を後にすることも増えました。この日、速報をチェックする時も、複雑な気持ちでした。

半ば苦い思いをする覚悟をしていましたが、結果を見ると、２位。正直これは嬉しい驚きで、「たまには良いこともあるものだ」と、また励みが生まれたように感じました。「この流れを断ち切らずに、全日本を走り切れば、あるいは」という気持ちにもなりました。ただ、１位とは大差があり、３位以下にも「次のレースで勝てる保障は全くない」という顔ぶれが並んでいました。「今日は針が良い方に振れたに過ぎないのだから」と、気を引き締め直すことは忘れませんでした。

そして迎えた一週間後の全日本大会。今度は、針が悪い方に振れました。中盤で大きなミスをしたものの、粘りも発揮して、「入賞はできないまでも、来年度の全日本出場権確保（10 位以内）にはなったかな」という感触でフィニッシュしました。ところが、結果は 15 位。「自分は、今世紀になってからは、誰よりも長く連続（2003 年度～2013 年度の 11 回連続）で全日本に入賞してきたのだ」。不安を感じていた冬の時期にもその矜持は常に持っていましたし、長年の経験から、メンタルな面に大きく左右される全日本大会は泥仕合になることが多いと熟知しているつもりでした。諦めさえしなければ、順位は付いてくるはず…でしたが、今回は違いました。

連続入賞が途切れた落胆は、さほど大きくありませんでした。（「惜しくも逃した」というより、「チャンスがなかった」いうぐらいのタイム差が入賞者との間にありましたから。）それよりも、「この走りをすれば、このぐらいの順位」「このコースだと、失敗する選手も多い」というように、勝負の帰趨を読み間違えていたことを深刻に感じました。この読み違えは、「時流に付いて行けていない」ことを意味するかもしれないからです。

入賞はちょっと難しくても、10 位以内は「何とか届く」ようにも見える、と言って言えなくもありません。確かに、「フィニッシュ後の実感より順位が良いレース」もあれば、「実感より順位が悪いレース」もあります。京大京女大会と全日本大会の順位の差は、出場選手数の違いの他、「針の振れ幅の範囲」の「誤差」ととらえることもできます。したがって、順位だけに一喜一憂するのもいけません。

そうはいっても、今のままで良いわけではありません。タイムだけでなく、順位は間違いなく「内容」を色濃く反映した数字です。「オリエンテーリングの質が落ちている」「今まで並走していた集団から脱落しそう」という自身の状況を再認識し、再度ペースアップを図る必要がある、と考えています。

揺るがないもの

全日本大会から１ヶ月半後の大阪ＯＬＣ大会での順位は８位。この日のフィニッシュ後は、「全日本大会より出場選手層は薄いけれども、全日本大会より出来が悪いから、全日本大会と同じぐらいの順位か」と推測していましたので、「思ったより良い順位だった」ということにはなりました。「数字の揺れ」を考慮に入れれば、京大京女大会、全日本大会共に８位だったとしても不思議ではなかったですし、「これが現在の適正な位置」と、あらためて把握できました。

「上位」や「賞状」はいつも得られる保証がない、と痛感します。一方、京大京女大会で得られた「コースを攻略する、あの快感」は、やりようによって高い確率で得られる、と信じられます。自分自身のオリエンテーリングの楽しみ方には、「勝敗を争う」「上位を求める」といったことが存分に含まれていますが、この楽しみ方を続けられるようにするためにも「今は一旦順位のことは忘れてみよう」という気持ちになっています。

（松澤俊行）

＜松澤俊行プロフィール＞
1972 年生現在 42 歳。現在、虎視眈々とトップ争いへの返り咲きを狙っている。